

三浦綾子『道ありき』論（その二）

片 山 礼 子

本論は、前号（62号）所載の、三浦綾子『道ありき』論（その一）についての拙論を承けるものである。

前号では、三浦綾子文学の魅力や、なぜ多くの人に読み継がれるのかを、自伝小説『道ありき』の分析や読解によって考察をしてきた。そこで、三浦文学と短歌との関係について、ここでは、特に、『道ありき』にみられる彼女の短歌を中心に、次に示した項目に基づいての考察を深めたい。

- （一） はじめに
- （二） 三浦綾子の短歌－その1－
- （三） 三浦綾子の短歌－その2－
- （四） 『氷点』から『道ありき』へ
- （五） おわりに

（一） はじめに

三浦綾子の短歌については、あまり広くは知られてはいないが、著者は『道ありき』の中で「いまわたしは小説を書くようになったが、アララギに学んだことが実に大きな益となっている」（四十章）と述べている。

つまり、短歌との出会いが、作品の構成や主題に大きく影響を与えている点は見逃せない問題である。

ここでは、「アララギ」に発表した三浦綾子の短歌について分析、考察する。

以下、本論で取り上げる短歌は、三浦綾子が短歌雑誌『アララギ』に発表した初期の頃の作品にふれてみる。『アララギ』第一号には、8首の短歌が掲載されている。しかし、奥付はなく、発行年月日も不明である。

第二号（昭和二十四年）では、「雨に濡れし草分けて行くかすかなる膝関節の痛み覚えつゝ」、やわらかき土の感触を覚えつつ昏れ行く街の灯を眺め居り」など、第一号に発表した短歌「屈まりて痰に苦しむ君の咳が漸く鎮まれば又淡々と語る」他、詠まれている歌のモチーフに多少なりとも違いを認めることができる。もちろん、著者が脊椎カリエスという病魔に冒され、余儀なく闘病生活を強いられていた時期だっただけに闘病生活を題材とした短歌にも多く出会うのだが、いずれにしても、詠ま

れている短歌のモチーフは、日常の生活の中での著者の感じとったことを率直に詠み上げた短歌が多いことに気付く。

しかし、昭和36年を境に、三浦綾子は短歌を詠まなくなっている。このことについて「毎日が幸せ過ぎて、わたしは歌を忘れて行った」と述べている。こうしたことも視野にいれながら三浦綾子文学の考察を深めたい。

『道ありき』の中では、彼女の短歌が多く掲載されている。特に18章から58章において、67首の短歌を認めることができる。その短歌の章毎の掲載数は(注一)に示す通りである。この数値から、注目してみたい箇所がある。それは、47章での短歌数の多さである。このことは何を意味しているのか。それは、前川正氏が亡くなった時期と一致する。三浦綾子にとって、13年間にも及ぶ闘病生活、その中で培われた人間洞察の鋭さとも関わってこよう。そして、後々の作品展開にも多大なる影響力を及ぼすこととなる。一時は虚無、絶望のなかで、短歌との出会いは彼女の再生の道へ繋がるのである。

ここでは、そうした三浦綾子の短歌についての考察を加えたい。

(二) 三浦綾子の短歌一 (その1) 一

- (1) 雲ひとつ流るる五月の空を見れば君逝きしとは信じがたし
- (2) 君死にて淋しいだけの毎日なのに生きねばならぬかギブスに臥して
- (3) 君逝きて日を経るにつれ淋しけれ今朝は初めて郭公が啼きたり
- (4) 君が形見の丹前に刺しありし爪楊枝を見れば泪のとまらざりけり
- (5) 耳の中に流れし泪を拭いつつ新たなる泪溢れ来つ
- (6) 闇中に眼ひらきて吾の居りひよとして亡き君が現われて来るかも知れず
- (7) 吾が髪と君の遺骨を入れてある桐の小箱を抱きて眠りぬ
- (8) マーガレットに覆われて清しかりし御棺と伝え聞きしを夢に見たりき

- (9) 君の亡きあとを嘆きて生きている吾の命も短かかるべし
- (10) さまざまの苦しみの果てに知りし君その君も僅か五年にて逝きぬ
- (11) 君の写真に供えしみかんを下げた食ぶるかかる淋しさは想いみざりき

（番号は引用者）

ここに、示した短歌は、幼なじみ、前川正氏が亡くなった頃に詠みあげ、アララギ、その他に発表した三浦綾子の短歌である。いずれも「君」なる人への死に対しての心の痛みを訴え、数多くの挽歌を三浦綾子は次々と生み出した。そして、これらの歌は当初、彼女が短歌雑誌『アララギ』に発表した短歌と比してみても、テーマ、内容におのずと変化が見られる。このことは、歌を詠み始めた頃の著者のつぶやきのごとく日常の生活をテーマとした短歌においても、同じようにその内容に違いが見られる。

その頃の彼女の短歌は、当時の三浦綾子の精神にふれる思いがする。それは、長い時間の中で勝ち得た三浦綾子の内面的葛藤の果てに得た精神そのものではなかろうか。そのことは、人としての「生」なるものを希求する彼女の再生の道であった。換言すれば、三浦綾子のあらたな出発といえよう。

周知のごとく、彼女にとっての転機、作家としての第一歩は『氷点』を抜きにしては語れないであろう。しかし、さまざまな観点から考えて見るならば、幼なじみ前川正氏の影響、三浦光世氏との出会い、そして、結婚へと。この当時の事については『この土の器をも』に詳しい。また、彼女の幼少時からの並々ならぬ読書量の多さは言うに及ばない。

三浦綾子は少女期に、すでにヘッセの『デミアン』など、質、量ともに旺盛な読書量があげられる。こうした指摘は『評伝・三浦綾子』に詳しい。（注二）また、その他三浦綾子のアララギに発表された短歌から、後々の三浦綾子文学へと広がっていくことを予知することができる。

（三） 三浦綾子の短歌一（その2）一

ここでは、彼女が短歌雑誌『アララギ』に発表した、昭和24年から昭和27年頃の歌について考察をしてみよう。『アララギ』第一号から第三十三号（第一号には、奥付はなく、発表年月日は不明）、しかし、第二号（昭和二十四年）から第三十三号（二十七年）において、三浦綾子氏の叙景や抒情を詠み上げた短歌を発表している。そうした短歌について注目してみたい。

- (12) 偽られし憤る気力もなく君と歩調を合わせつつ歩む
- (13) 屈まりて痰に苦しむ君の咳が漸く鎮まれば又淡々と語る。
- (14) 夜半に帰りて寝着にも更へず寝る吾をこの頃父母は咎めずなりぬ。
- (15) 雨しぶく丘の小径に佇みて一つの想いに堪えていたりし
- (16) 風雨激しき丘を歩みて咳き込みし時午後四時のサイレン聴ゆ
- (17) 自己嫌悪激しくなりて行きし時黒く濁りし雲割れにけり
- (18) 透明な空気愛しみ枯草の一つをとりて振りつゝ歩む
- (19) 雨も過ぎ風もやみたる丘に立ちやわらかき土の感触に心和みぬ
- (20) 惰性にて生き居る吾と思いたり体温計をふりおろす時
- (21) 湯たんぽのぬるきを抱きて眼醒めいるこのひとときも生きていと云うのか
- (22) 一室にこもりてもの云わぬ日が続けば矢張り我がまゝとのみ家人は想うらし
- (23) 胸痛を告ぐるともなくうす暗き茶房の隅に身を横たえる
- (24) 退院の君と電車に乗らんとすこの一瞬は永久に帰らず
- (25) 朝よりの静臥に倦みて眼を開けば吾が吐く息がしらじらと見ゆ
- (26) 熱高き身を横たえて窓外の雪の乱舞に見惚れていたり
- (27) 凍りたる蜜柑を口に含み居れば俄かに熱き泪溢れ来ぬ

- (28) 君の便りは今日も来ぬらし寝返りを打てばあらたに背痛起る
- (29) 幼き日の事のみ思い出づる夜か電燈がにわかにも明るさ増しぬ
- (30) 「主婦之友」の内職欄を読み居ぬ胸痛む吾に生きる術がありや
- (31) 生きているを沁々と想いきどくだみの煎じぐすりの湯気を見て居りしに
- (32) フォルマリンの匂う寝巻に看更えつつ心素直になりて行きたり

（番号は引用者）

ここにあげた短歌について、特に、昭和24年の頃の作品、(13)「屈まりて痰に苦しむ君の咳が漸く鎮まれば又淡々と語る」(14)の「夜半に帰りて寝着にも更へず寝る吾をこの頃父母は咎めずなりぬ」など『アララギ』第一号に発表した彼女の短歌には前途に失望し、そのテーマは虚無観を漂わせているものが多い。(15)「雨しぶく丘の小径に佇みて一つの想いに堪えていたりし」、(16)「風雨激しき丘を歩みて咳き込みし時午後四時のサイレン聴ゆ」、(17)「自己嫌悪激しくなりて行きし時黒く濁りし雲割れにけり」など『アララギ』第一号・第二号と初期の頃に発表した短歌では、自己自身の身辺から、「生」、「死」に関わっての短歌が多いことが窺われる。また、詠まれ方も技巧に走るといふよりも、感じるままに、率直に詠い上げている点に注目をしていいと考えられる。また、「乞食なども羨ましくなるこの夜よ郵便局のベンチに臥して居りしに」(第三号)、「人と争う意地なき性の吾なれば乞食となりて暮らさんかと思う」、他にも「何となく明日死ぬ如き予感して枕正して眠りに就くも」をはじめ、「おやこんなに穏やかに微笑む時もあるのかと鏡の中の吾を見つめり」など、その頃の三浦綾子の短歌から、病気と向き合い、それらに関する事柄や、身体的なことに関する内容が多いことにも気づかされる。その一方、自由な立場から、その題材は広範囲に及んでいることも事実である。

その他、独白、「いちじく」の綾子氏の作品から、後日の小説に繋がる作品の骨格が出来上がり、全体像がすでに予測できたのではなかろうかと、結論づけても不自然さが無いほど、作品から取り上げた題材のイメージネーションの深さに気づかせられる。このことについて、上出恵子氏は「詠うのではなく、語ること」と三浦綾子の「私の中の短歌」に注目している(注三)。また、小古間祐子氏が三浦綾子の信仰についてふれ、彼女にとって「信仰とは、散文の形でようやく語り得る種類の問題であり、短歌という表現方法では語り切れないものであったからではないのか」(注四)と指摘している。

確かに、そうした観点から三浦綾子と短歌について、分析もできようが、三浦綾子にとっての短歌

は、後々の三浦文学を生み出す上で欠くべからずものではなかったのではないかと考える。なぜならば、凝縮された、短歌を通して内面のほとぼしりが決して韻文という枠組みのなかで閉塞しているとは考えないからである。つまり、後々、三浦綾子が文学と関わっていく中で、何を伝えようとしているのか。自らも語っているように、短歌との出会い、それは、韻文から散文へと作家・三浦綾子の『氷点』に代表される作品に大きく影響を与えていることが確信できるのである。そのことは、三浦綾子『道ありき』をはじめとする自伝小説、その他『草のうた』『石ころのうた』そして『この土の器をも』を通じて今日的課題に触れ、多くのテーマを内蔵していると考えからである。それは、生き方に関わる問題であったり、人間の哀しさ、弱さ、矛盾と無関心ではいられない問題を孕んでいる。

十三年間に及ぶ闘病生活の中で培われた人間観察の鋭さにも繋がっていよう。『氷点』をはじめとして、そのテーマは現代社会に関わって多くの根源的な問題を含んでいる。

(四) 『氷点』から『道ありき』へ

『氷点』と『道ありき』に関して、作品の発表時期は、『氷点』(昭和39年)から『道ありき』(昭和42年)と三年の隔たりがあるが、その時間軸は同時代であると言える。そして、三浦文学にも通じる「罪」の意識を、それらは『氷点』の「原罪」の意味とも絡みあっているのではなかろうか(注五)。

『氷点』は旭川を舞台とし、その中で描かれる人物関係が明確であり、リアリティ性は充分である。『氷点』が発表された当時、読者はどのような印象を持ったのであろう。おそらく、そのストーリーに新鮮さを感じたに違いない。「たった一人でもいい。この小説を読んでもらえるなら、そして、人間だれもが持っている罪の意味を理解してもらえるなら…という気持ちで私は『氷点』書いた」と三浦綾子は述べている。しかし、彼女にとって、『氷点』は、作者のそうした考え方と予想を反して、大変なブームをおこすこととなる。すでに、林田律子のペンネームで、『氷点』発表以前に作品が発表されている。しかし、『氷点』は、三浦綾子その人の作家としての大きな転機となる作品であるばかりか、三浦文学を語るにあたって決して、避けることが出来ない彼女の原点とも言える。また、『道ありき』をはじめとする他作品への及ぼしている影響力も多大である。また、なぜ、この作品がブームとなり、多くの人に読まれる所以は何なのか。こうした考え方に基づいて『氷点』を分析する必要性もある。もちろん、『道ありき』の中で絶望の果て、虚無的な心境については自ら語っている。また、『氷点』に関して、三浦綾子は次のように述べている。まず、題についてである。「氷点」というタイトルがかなりの人々に褒められたことについて、また、ある女学生からは「題だけでも人をどきっとさせるような、新鮮な題をこれからもつけてください」など、そうした内容のものが、彼女のもとへ届いたことも示されている。また、三浦綾子は次のようにも述べている。

この「氷点」という題は、実はわたしがつけたのではない。三浦がつけてくれたものである。小説

のあら筋は一晩でできあがったが、一番先にわたしが書いたのは、遺言の章である。小説では、この遺言は最後になって出てくるわけだが、作者のわたしの頭にはこの章が最も鮮明に浮んでいたのである。

この遺言を書きながら、わたしはボロボロと涙をこぼしていた。

「わたしがこの小説を書きたいのは、この遺言を書きたいためだ」

こうわたしは呟いたものである。その遺言の中に「氷点」という言葉を見て、三浦が「氷点」という題にしようじゃないかと言ったわけである。

確かに、『氷点』ではヒロイン陽子の遺書は大きな意味をもつであろう。それらの遺書について、読者は、さまざまな解釈ができる。だが、陽子が残した遺書の中で最も印象深いのは、陽子が徹に宛てた遺書であろう。ここには、素直に自分自身に向き合っている陽子を見出すことができる。前号でもふれたが、『原罪』をより具体的に読み解く鍵も、この遺書の中にその糸口が託されていよう。ヒロイン・陽子の気持ちを理解する意味でも、その遺書の部分を列挙してみたいと思う。

長い間、辻口家の娘として育てて下さった御恩に、何のおむくいすることもなく、死んでしまうということは、ほんとうに申しわけないことと思います。

冒頭は、このような言葉から始まっている。どのような事に出会っても、陽子は強く生きる事を考えていたにもかかわらず、母・夏枝の言葉で陽子は自分自身の出生の秘密を知ることになる。その事実を知った陽子は遺書の中で「人間の確信など、こんなにも他愛ないものなのではないでしょうか」と語っている。

こうして、ヒロイン・登場人物の胸の内を、情景に重ねあわせながら、語ることもできよう。その他、書簡体、日記体でも語ることもできよう。また、『氷点』のように、遺書を通じて、描かれている人物像や、テーマがより明確になっていく可能性が込められているのである。

遺書は、啓造・夏枝に宛てたもの、そして、北原、徹、辰子へと、ヒロイン・陽子の心と作品を読み進める中で明らかになっていく。そして、見落としてならないのは、徹への遺書で、陽子がみずから命を絶とうとするとき、陽子は一番お会いしたい人として、徹をあげている。ここに、「原罪」の意味、三浦綾子が最も伝えたかったこと。換言すれば、『氷点』で何を伝えたかったのが窺われはしないだろうか。遺書には、「一途に精いっぱい生きて来た陽子の心にも、氷点があったのだということ」と印象的な一節がある。

他にも、「私の心は凍えてしまいました」そして、陽子の氷点は、「罪人」の子であったということ。「人の前に顔を上げることができません。どんな小さな子供の前にも、この罪ある自分であるという事実耐えて生きて行く時にこそ、ほんとうの生き方がわかるのだという気も致します。私には、それができませんでした。残念に思いますけれども、私はもう生きる力がなくなりました。凍えてしまったのです」と続く。

この場面で、気になる描写にであう。それは、陽子が自ら命を絶とうとするとき、ヒロイン・陽子が、一番お会いしたい人として、徹をあげている点である。そのことは、決して不自然ではなく、むしろ陽子の素直な内面を表出しているといえるだろう。

陽子にとって、最も心がゆるせる人、それは、啓造でも夏枝でも北原でもない。一途に向き合い、陽子を大きな気持ちで受け止めようとする徹だったのだ。それは、「神」の存在さえも超えた、人としての幅の広い人間の根本的な問題にふれることができる。つまり、三浦綾子の人間をみつめる広い視点が、この場面からも窺われよう。それは、三浦綾子氏が闘病生活を通じて見た現実、それまでに培ってきた自己との闘いのなかで知った真実、それは、ヒューマニズムに富んだまなざしにも似ている。

『道ありき』論(その一)の中でも述べたが、小説の舞台となった見本林、作品と場所の問題は切り離すことができない。その見本林を詠んだ光世氏の短歌がある(注六)。この見本林は、三浦綾子氏が、光世氏と出会って、よく二人で訪れた場所だったことも後日語っている。つまり、見本林は作品の中でも大きな意味がある。では、「見本林」は『氷点』の中で、どのように描写されているのであろうか。

見本林の中には、管理人の古い家と赤い屋根のサイロと牛舎が建っていた。下草がぼうぼうと長けて、林の中はうす暗かった。林の中で山鳩が低く啼いた。めったに日の当ることのない林の中の道は柔らかくしめっている。林の中に夕光が漂っていた。けぶっているような光りであった。木の間越しに斜めにさす光は、所々に縞目を作っていたが、その縞目もおぼろであった。

この見本林を三百メートルほど突きぬけると、石狩川の支流である美瑛川のほとりが出る。氷をとかしたような清い流れの向うに、冬にはスキー場になる伊ノ沢の山が見え、遙か東の方には、大雪山に連なる十勝嶽の連峯がくっきりと美しい。

『道ありき』でも旭川の地名は多く出てくる。

三浦綾子の作品には、旭川、又その近郊の土地が舞台になっている。

作品と「場」の問題は、小説を読む上で、決してないがしろにはできない。そうしたことも意識し

ながら作品と向き合わなければなるまい。

今、ここで『氷点』のあらましについて、あらためて書くつもりはないが、冒頭の「風は全くない」の冒頭は、最初「風はなかった」、「風はすこしもない」と三浦綾子の生原稿には何箇所か書き加えられている。七月の旭川の夏の様子が「風は全くない」との表現から、静けさそのものが伝わり、真夏の情景をより印象づける。

後日、三浦綾子は、はじめから『氷点』を応募しようなどと考えていたのではないことを述べている。まさに、12月31日締め切り日の最終日に作品が完成するのであった。そして、応募原稿731篇中、第一席として『氷点』が選ばれるのである。

（五） おわりに

こうして、『氷点』をはじめ、小説、エッセイ、自伝小説『道ありき』と三浦綾子の作品を通して、感じることは「ことば」そしてストーリーテラーとしての三浦綾子の物語性の面白さである。読者を引きつける魅力がある。その表現方法は、最初はずぶやきであったものが短歌として結晶し、そのジャンルは小説、随筆と広範囲にわたっている。いずれも共通していることは、言葉を媒体としているという点である。また、短歌に関して、興味深いこととして、必ずしも31文字の定型に収まっているとはいえない。病気と向き合う中での心境を歌に託していることも特徴といえよう。そして彼女は（昭和36年以降）短歌を詠まなくなっている。この時期は、『氷点』発表の3年前の時期にあたる。このことに関して、それまでの短歌から惜別というよりも、小説というジャンルへと三浦文学が開花していく過程でもある。『道ありき』を通じて、多くの短歌、そして言葉から数々のメッセージを受け止めることができる。そのことは、三浦光世と共に歩む、三浦綾子の新たな文学への出発でもあるといえる。

（注）

注一 『道ありき』に関して、18章から58章まで短歌が67首収められ、章毎の分布（表1）に示すとおり北海道教育大学片山晴夫氏の報告がある。『旭川市民文芸』41号（1999年）

注二 高野斗志美氏『評伝 三浦綾子—ある魂の軌跡』（旭川叢書第27巻）

この中で、三浦綾子氏が大変な読書家であったことを示している。

そして、「彼女が求めていたのは、たんなる知識ではなかった。それをはるかに超える何かであった」と記している。

注三 上出恵子著『三浦綾子研究』（双文社出版）2001年

注四 小古間祐子氏『解釈と鑑賞』(第63巻11号)至文堂—「三浦綾子の短歌」—

注五 『氷点』と『道ありき』に関しては、後日、稿を継ぎたい。

注六 三浦光世氏が見本林を詠んだ題材に短歌に次のような歌がある。

雪虫の舞ふ松林出でくれば胡桃林の急に明るし

秋日透き明るき胡桃林なり根方ふかぶかと笹生の茂り

表 1

『道ありき』では、18章から58章まで短歌が67首収められている。章毎の分布(短歌の数)は、次の表の通りである。

章	15	17	20	21	23	36	37	40	43	44	45	46	51	56	58	
綾子	3			9	1		1	1	21	1	2	1		1		41
光世								1					1	1	3	5
前川正			13	1		1		1								16
他								1	1							2
重複		1						1					1			3
計	3	1	13	10	1	1	1	4	22	1	2	1	2	2	3	67

この表から、『道ありき』においては43章が1つのクライマックス(物語の頂点、山場)を成していることがわかる。全67首(重複3種を含む)のうちの、ほぼ3分の1の21首が、43章に集められているのである。との報告がある。

〔付記〕本稿の引用文(短歌)の表記においては、旧仮名遣いを新仮名遣いとした。